

学生の「ボランティア」に関する意識と大学の支援体制

—山口大学の現状と課題—

辰己佳寿子 吉田 香奈
門脇 薫 辻 多聞

要旨

本稿は、山口大学を事例に、学生のボランティア活動を大学がどのように支援すべきか、という課題について検討を行ったものである。学生にはボランティア活動に参加するための後押しが必要であり、具体的な支援策として、情報交換や調整を行う空間（ボランティアルーム）の創出および専門家（ボランティアコーディネーター）の配置の必要性が明らかとなった。

キーワード

学生ボランティア活動，学生支援，ボランティアルーム，ボランティアコーディネーター

1. はじめに

大学全入時代を直前に大学が急激な変革を迫られている中で、大学の社会的な役割が問われている。大学には、学生の人間的な成長を促すとともに、急速に変化する社会のニーズに対応できる自立（自律）した個人を社会へ送り出す役割が課せられている。自立（自律）した個人とは、与えられたことを実行するだけでなく、様々な社会の中で、自らが問題を設定し、問題解決策を考え、そして行動できる人間を意味する。しかしながら、近年、都市化、核家族化、少子化等の進展により、地域社会の連帯や人間関係の希薄化が進み、このようなプロセスを経験する機会が少なくなっている。

このプロセスは、「発見し、はぐくみ、かたちにする知の広場」という山口大学の理念に通じるものであるが、学内でも同様にそれらを経験する機会が少なく、大学による組織的な支援体制も十分とはいえない。学生の自

主的な活動を、山口大学はこれまで以上に支援していくことが急務とされている。

学生の自主的な活動には、サークル活動、プロジェクト参加型活動¹⁾、ボランティア活動、アルバイト等、様々な形態がある。なかでも、ボランティア活動は、自発性、無償性、公共性、創造性という特徴をもつことから〔高橋・高萩1996〕、学生の自発的な学修を促す有効な手段の一つとして捉えられる。

以上のことを踏まえ、本論文は、地方都市の国立大学法人である山口大学の事例を通して、学生によるボランティア活動を大学がどのように支援すべきかという点に焦点をあて2004年度に実施された学生ボランティア活動支援等検討ワーキンググループ（以降「学生VWG」と表記）での議論にもとづき検討するものである。学生VWG発足の背景には、各大学が様々な施策を打ち出している中で、他大学の活動を単に模倣するのではなく、山口大学にとって必要な施策を導き出すことが重要であり、そのためには、まず現状と課題

を認識することが先決という問題意識がある。よって、第2章では、学生の「ボランティア」に関する意識や学生活動の実態、学生支援体制の概要等について行った調査を通して、その現状と課題を分析し、第3章では、支援体制の対応策を提案する。

なお、学生 VWG はボランティア活動に焦点をあてているが、学生の自主的な活動は、形態ごとに区切られるものではなく流動的なものとして捉え、全体的な学生の活動支援体制が必要であるという考えに基づいていることを付記しておく。

2. 学生のボランティア意識

2-1. 山口大学の学生支援体制

山口大学では、2003年度に「学生中心の大学」づくりを目指して学生支援センターを創設し、学生の修学・課外活動・就職活動など、学生生活全般にわたる支援体制の充実と発展に取り組んでいる。

しかし、ボランティア活動においては、大学に寄せられる依頼等を掲示板で公開するに留まっており、具体の活動状況なども把握していないというのが現状である。

2-2. 山口大学の学生の実態

昨今の大学生を形容する言葉として、古くは「無気力」や「しらけ」に始まり、現在は「上昇志向の喪失」「遊び志向」「私事主義(ミーイズム)」などがあげられる。また、携帯電話の普及やIT化により、人と人とのコミュニケーションが間接的でドライになりつつある。

学生 VWG では、まず山口大学の学生の実態を把握することに努めた。本章では、2000年に山口大学学務課が実施した学生生活実態調査、2005年に VWG が実施したアンケート調査とサークル等の学内学生団体のボランティア活動に関する調査の結果を分析する。

2-2-1. 学生生活実態調査

2000年に山口大学で実施された学生の生活実態調査によると、表1に示すように、ボランティア活動経験者及び地域活動経験者はそれぞれ3.1%にすぎない。学生のボランティア活動の参加度を他大学と比較してみると、表2に示すように、北見工業大学では9%、兵庫教育大学では41%となっており、山口大学のボランティア活動の参加度の低さが看取できる。しかし、山口大学の学生の地域活動への参加意欲をみてみると「積極的に参加したい」5%、「できれば参加したい」34.8%であり、「地域活動に興味を抱いているがもう一歩が踏み出せない」という学生が3割強も存在していることがわかる(表3)。

2-2-2. ボランティアに関する調査

学生 VWG は、2005年1月に山口大学の学生に対してボランティアに関する予備調査(対象35人)を行った²⁾。「ボランティア活動へ参加したいと思いますか」という質問に対しては「そう思う」「ややそう思う」と前向きに考えている学生は54.3%であった(表4)。参加について興味がない学生に対して「なぜ参加したいと思わないのか」という問いを行ったところ、「時間がない」という理由が最も多く、「勇気がない」、「興味がない」という回答もみられた(表5)。

一部には「ボランティア」に対するイメージが必ずしも良いものとは捉えられていないことも明らかとなった。「ボランティア」という言葉は、そもそも自発性からくるものであるが、近年、「ボランティア」という言葉が一人歩きをしていて、学生各自がもつ認識が異なっている。これは、「偽善的」「篤志奉仕家」という固定化された「ボランティア」のイメージによるものである。自発的な活動を無償で行っているにも関わらず、自らをボランティアと認めたくない学生が存在している。聞き取り調査によると「何も特別なこと

表1 ボランティア活動経験者及び地域活動経験者

区分	全体	男性	女性	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
地域活動	3.1%	3.1%	3.1%	2.4%	2.5%	3.1%	5.5%	—	3.3%
ボランティア活動	3.1%	2.7%	3.5%	1.6%	2.8%	4.3%	4.9%	—	—
サークル活動	2.6%	2.5%	2.8%	1.2%	0.7%	2.7%	4.9%	11.8%	13.3%
顔見知り程度	26.7%	23.3%	29.7%	29.8%	26.8%	23.7%	27.9%	23.5%	20.0%
全く接触はない	68.1%	72.7%	64.2%	66.7%	70.1%	70.8%	64.5%	64.7%	66.7%

出所) 山口大学学務部, 2001, 『第14回学生生活実態調査報告書』

表2 学生のボランティア活動の経験

経験について	北見工業大学		兵庫教育大学					
	回答数	割合	男子		女子		計	
			回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
ある	97	9%	33	30%	119	46%	152	41%
ない	639	60%	75	68%	129	50%	204	55%
無回答	325	31%	2	2%	11	4%	13	4%
計	1061	100%	110	100%	259	100%	369	100%

出所) 北見工業大学, 2004, 『平成15年度第9回学生生活実態調査報告書』
兵庫教育大学, 2004, 『平成15年第7回学生生活実態調査報告書』

表3 山口大学における学生の地域活動への参加意欲

区分	全体	男性	女性	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
積極的に参加した	5.0%	5.0%	5.0%	5.9%	4.9%	4.7%	4.9%	—	3.3%
できれば参加したい	34.8%	37.2%	32.8%	35.7%	33.8%	33.5%	37.7%	47.1%	26.7%
あまり参加したくない	59.3%	57.2%	61.4%	58.0%	60.2%	61.9%	56.3%	47.1%	70.0%

出所) 山口大学学務部, 2001, 『第14回学生生活実態調査報告書』

をしているわけではないので、あえてボランティアをしていると言いたくない」というのが、その学生の理由である。

社会的な活動であるはずのボランティア活動が個人的な興味・関心、あるいは趣味の域で捉えられていることがその言動にあらわれている。学生の間では未だ「ボランティア」は一般的な言葉として概念化されていないといえる。よって、学生に対してボランティアに関する正しい知識を提供する機会が必要である。

その他、ボランティアという言葉を使用せず「学外活動」への参加について尋ねたところ、「そう思う」「ややそう思う」の回答率が65.7%と「ボランティア活動」への参加を望む回答率よりも高い結果が得られた。これは、

「ボランティア」というイメージが捉える人によって異なるためであると考えられる(表6)。

また、参加するための条件については、「誰かが誘ってくれたら」という回答が最も多かった(表7)。これは、前節で触れた“地域活動に興味を抱いているがもう一步が踏み出せない”という学生の存在や、表5で「勇気がない」という回答があったことに通じている。いずれにしても参入時点で何らかの支援が必要であることが再確認される。その他、「授業の一環で単位につながれば」という回答が多くあり、正課授業として位置付けることは“もう一步”を踏み出す後押しの一つの手段となり得る。

ボランティア活動への参加を促すための必

要事項を尋ねたところ、「情報提供」や「参加の呼びかけ」という回答が圧倒的に多かった(表8)。情報には、ボランティア情報が得られる場所・手段や具体的な活動内容、ボランティアの意義や体験談に関する情報等が含まれている。2番目に回答の多かった「意識改革」については、ボランティアに対する

正確な認識や意義を知ることで、学生のボランティアに対する意識に変化が生じる可能性がある。全く興味のない学生であっても、まずは「ボランティア」について知ることで何らかの変化が生じるかもしれない。参加する以前の問題、つまり、ボランティアを知るきっかけを作ることが優先課題である。

表4 ボランティア活動に参加したいと思いますか

回答項目	回答数
そう思う	7
ややそう思う	12
どちらとも言えない	9
余りそう思わない	1
そう思わない	2
無回答	4
計	35

出所) 学生 VWG 調査 (2005年1月)

表5 ボランティア活動に参加したいと思わない理由は何ですか(複数回答)

回答項目	回答数
学業で忙しいから	3
バイトで忙しいから	3
偽善者のようにみえるから*	3
参加する勇気がないから	3
勇気とお金がないので参加していないだけです(私は)	1
時間がないのと。面倒なのと。	1
あまり興味がないから	1
ひきこもりだから	1
ボランティアの内容により参加の是非は決めたいから	1
自分のためにやるのはボランティアとは思わないです	1
様々な人々の集まりで、統率がとれなくテキパキとしていないことが多いから	1

出所) 学生 VWG 調査 (2005年1月)

注) その他のコメント

「活動しただけで満足してしまふ。だからどこかで自分はエライと勘違いしてしまいそうだから。自己満足にすぎないように感じられる。」

表6 学外活動に参加したいと思いますか

回答項目	回答数
そう思う	4
ややそう思う	17
どちらとも言えない	9
余りそう思わない	3
そう思わない	0
無回答	2
計	35

出所) 学生 VWG 調査 (2005年1月)

表7 どういう条件なら学外の活動に参加する気になりますか

回答項目	回答数
誰かが誘ってくれたら。友達と一緒になら	16
アルバイト(有償)	12
授業の一環で単位につながれば	8
ボランティア(有償)	6
機会があり、また自分がその気になったら	1
興味のある分野の活動なら	1
幸せになれるなら	1
時間があって楽しそうならば	2
自分のためになるならなんでも	1
自分を磨けば(色んな意味で)	1
自分の知人が本当に困っていたら、その助けになるようなこと	1

出所) 学生 VWG 調査 (2005年1月)

表8 ボランティア活動への参加を促すには何が必要だと思いますか？（複数回答）

回答	回答数
情報提供，参加の呼びかけ。（具体的な活動内容，ボランティアをすると何が得られるのかという情報）	18
意識改革	5
時間	2
知名度	1

注）その他のコメント

「潜在的にボランティアをしたい！ と思っている人はいると思うので。」

「例えば，その地域の特産品を使った料理など。お金ではなく，何かちょっとしたふるまいがあれば参加しようと思う人は増えるかも」

「飢えが足りないから。日本はみんなが裕福と感じているから，ボランティア活動への参加を促すことは無理だと思う」

出所）学生 VWG 調査（2005年1月）

2-2-3．学内学生団体のボランティア活動

2005年1月現在，山口大学では，表9のとおり，サークルや団体レベルでボランティア活動が行われている。団体の形態は様々であり，単発イベント用の動員の団体（例：映画の上映会実行委員会），一見ボランティア団体にみられなくとも実際にはボランティア活動を行っているところ（例：落語研究会）もある。山口大学では，山口大学学生赤十字奉仕団や山口大学手話サークル，山口BBS会等の活動が活発である。

学外の団体からの学生ボランティア活動の依頼は学生支援課が窓口になっているが，体育会所属サークルにおいては，所属協会・連盟等からも入り，学生が各種大会の審判員等に従事することがある。また，地域と大学との架け橋を担う「メディエーター」を通して依頼が入る場合もある。

このように各団体間で，口コミでネットワークが広がっており，それらの活動を通じて，学生達は，参加することで得られる充実感や満足感，新しい発見等を感じとっている。これらのネットワークを活かしてさらに円滑に進められるようシステムを充実させることが重要であろう。

2-3．学生ボランティア活動の問題点と課題

山口大学の学生の実態を把握してきたが，

問題点は大きく①情報不足，②ボランティアに対する理解不足，③安全性，④不十分な支援体制，の四つに分けられる（表10）。

①「情報不足」に対しては，空間的に人が交流し情報交換ができる場，つまり，「あそこに行けば情報がある」もしくは「発信したい情報があればあそこにもって行けばよい」という情報が集まる空間の創出が必要である。情報受信者と情報発信者が出会う場である。そこは単なる空間ではなく，コーディネーターの配置によって，あと一歩踏み出せない学生，一歩踏み出したもののどう動いてよいか分からない学生の相談や指導が可能となる。

②「ボランティアに対する理解不足」は，講習会や講座の開設，ガイドブック配布，ボランティア経験者や未経験者との議論や交流の場等によって解消の道が開ける。

③「安全性」については依頼元がイベント保険に入っている場合もあるが，自己責任のもとで保険に入っておく方が好ましい。

④「不十分な支援体制」に関しては，上記3点の問題点に関係してくることであり，組織的な支援が必要である。一部の学生に依頼が殺到する過重労働や学業との両立を考えて，需要と供給のバランスを図る必要があり，そのためには登録制によって適材適所に依頼が届くシステムの構築が必要である。現在は

表9 ボランティア活動を行っていると思われる学内学生団体について

団体名	活動内容	人数	活動時期	活動場所
山口大学学生赤十字奉仕団(山大SRC)	献血活動・施設訪問・その他ボランティア活動	30名		年間を通して 学内 学外
山口大学手話サークルH.O.L	手話の勉強・聾者との交流	36名		
「神の子たち」上映会実行委員会	神の子たちを上映し、国際的な貧困のテーマを大学生の間で共有する	9名		
山口BBS会	子ども系ボランティア(ともだち活動、非行防止活動、研鑽活動)			
山口大学ユネスコクラブ	社会問題学習(社会問題についてさらなる知識を深め、興味を持ち議論していく場)			
落語研究会	日本の伝統文化である落語を公演などを通じてひろく広める(老人ホーム慰問等)	10名		
トム・ソーヤーズ	子どもたちと自然の中で、キャンプ等の野外活動を楽しみながら協同生活を送り、自己の成長等を促す	16名		
留学生交流ボランティア	日本人学生と留学生が互いに助け合いながら文化間交流をしていく活動を通じて仲良くなり、お互いの生活をサポートしよう(H15年度)	20名		
めだかの学校	子供ボランティア(おもしろプロジェクト 04の採択企画)	43名		
学生耕作隊	農業ボランティアNPO			
徳地野外活動クラブ	子ども系ボランティア(H12年度まで団体結成届有り)			
地域活動おたすけターミナルメディアーター	山口大学・山口県立大学・山口芸術短期大学の連携及び地域と大学が共に活動する際の架け橋となり、地域活性化の手助け	11名		
山口大学生協学生委員会	学生がより生活しやすい山口大学にするための活動	25名(H15年度)		
環境プロジェクト(工学部)	キャンパス環境問題の取組			

注) 団体名の前に 印の付いている団体は、平成16年度に団体結成届を提出している団体
上記以外に、体育会所属サークルにおいては、所属協会・連盟等からの依頼により、各種大会の審判員等に従事している。

出所) 学生 VWG 調査(2005年1月)

表10 ボランティア活動に関する問題点と対応策

問題点	対応策
情報不足	→情報や人が集まる空間を創出する(ボランティアルームの設置)
ボランティアに対する理解不足	→ガイドブック配布や講習会・講義の開講
あと一歩踏み出せない学生	→オープンな空間での情報公開と相談
どう動いたらよいかわからない学生	→指導や教育(講習会や講義)
需要と供給のアンバランス	→登録制とコーディネーター(調査役)の配置
単発性、個別性、継続性の問題	→情報や活動を統括し、より効率的に行えるよう支援する →人的ネットワーク等をシステムとして残す (ボランティア希望者の登録、データベース)
安全性の問題	→安全体制の整備(保険加入の義務づけ等、依頼側との交渉等)
バックアップ体制の未整備	→予算化、人材の確保、担当教職員へのインセンティブ

学生の個人的なネットワークで適材適所が試みられているが、リーダー的な学生が卒業してしまうと個人的なネットワークが途切れてしまうことになり、継続性に問題が生じる。よって、データベースの作成等で、システムとして残すことが必要である。また、学生のボランティア活動支援に対する予算や人材の確保、そしてこれらに関わる教職員へのインセンティブも忘れてはならない。

3. 大学におけるボランティア活動支援

3-1. 山口大学が支援するボランティア活動

3-1-1. 支援する活動について

山口大学の理念には「社会貢献」が掲げられており、山口大学が支援する学生ボランティア活動は、学生の社会貢献に位置付けられる。よって、個人的なものではなく社会性をもった活動を対象とする。学生ボランティア活動に参加することによって、参加者が学び成長すると同時に、豊かな社会を構築するための一員となることを目標とする。ただし、個人的な活動を否定するものではなく、情報提供、相談等、可能な限り支援する。

留意すべき点は、学生の本来の使命は学業であることである。大学側は、学生のボランティア活動を学生が豊かな感性と社会性を持ち自立・自律した個人として成長するための体験・経験を積む機会と捉え、学業に支障がない限りは支援すべきである。活動には一定の責任が伴うため、それらを考慮した上で、学生の自主性を重んじると共に、活動の参加は選択権が与えられるものとする。

ボランティア活動は、将来、プロジェクト型の事業に展開することもありえるし、ボランティア活動を通じた出逢いが展開して利益を生むこともある。学生の活動による様々な展開が上記の目的に沿っていれば、それを妨げず、学生のボランティア活動は自由でオープンなものとする。

学生ボランティア活動においては、様々な

状況が想定されるため、ガイドラインを作成することが肝要である。例えば、学生の修学につながるものであるか否か、単なる肉体労働用人員確保か否かの見極めが必要である。費用に関する交渉も重要である。ボランティアとなると無償性が強調されがちであるが、交通費や活動に必要な物品やコーディネートに係る経費など、客観的な判断をすることが求められる。その他に、教育的に好ましくないもの、危険を伴うもの、人体に有害なもの、政治・宗教色が強すぎるものは除外すべきであり、学内外からの依頼を査定する学内組織が必要となる。

3-1-2. ボランティア活動の分類

ボランティアには様々な活動があり、一概に分類はできず、一つの活動が複数の分野にまたがる場合もあるが、理解を容易にするために、表11では、「教育」、「国際」、「地域」、「環境」、「福祉」、「文化」に分類した。それぞれの具体例は以下のとおりである。

- A) 「必要な情報を必要とする人に」、情報交換。障害や異文化によるコミュニケーションの壁を持つ人へのサポート。パソコンやインターネットの接続を行うパソコンボランティア等。
- B) 障害学生のためのノートテイク、授業理解度が異なる学生間の修学支援。
- C) 学校の校庭開放に際し遊びの手助けをしたり、児童館などで子どもの世話をする等。
- D) 異文化（多文化）理解、国際交流、留学生への日本語学習サポート・生活サポート。
- E) 異文化（多文化）理解、国際交流。
- F) 地域への窓口としてのボランティアルームの運営。
- G) 地域問題解決やまちづくりへの参加。
- H) 学内の清掃、ゴミ分別、マイカップ運動等、まずは身の回りから。

- I) 地域の清掃や河川の浄化, 天然記念物の保護や, 鳥獣保護等の活動。
 J) 生活に関する情報提供や相談・支援(学生同士, 留学生や新生生に対して)。

- K) 高齢者福祉, 障害者福祉などに関わるボランティア活動。
 L) 遺跡の発掘や文化財保護等の活動。文化事業や文化施設での活動。

表11 ボランティア活動の分類

活動範囲	学内	学外(国内・海外)
対象	学生(留学生や障害学生を含む)教職員等	一般市民・市民団体等
教育	情報交換, パソコンサポート(A)	
	修学支援(B)	教育活動(C)
国際	留学生支援(D)	国際交流(E)
	国際交流(E)	
地域	地域への窓口(F) (ボランティアルームの運営)	地域交流(G)
環境	学内清掃等(H)	生活及び自然環境の保全・保護活動(I)
福祉	生活支援(J)	社会福祉活動(K)
文化	文化交流(L)	
その他	上記に該当しないもの	

大学によっては学生ボランティア活動の取組においては, 何かの分野に特化した傾向が強くなっているが, 試行錯誤の中で進めている段階では, 早急にオリジナリティを打ち出さなくても, 分野に偏らないオープンな体制づくりを構築することが優先課題である。ある程度の経過後, 一定の分野の活動が充実してくれば, オリジナリティが明確になるものと思われる。

3-2. ボランティアルーム(仮称)について

3-2-1. ボランティアルームの機能と役割

「ボランティア」に対する認識が共通していないのは, 「ボランティア」自体が捉えどころのないものだからである。それ故に, やれば終わりということではなく, 常に行動し活動し続けることで形が現われ, そしてまたそれ自体も変容していくものである。

それ故に, ボランティアとは何か, ボランティア活動をどう活かし, 公表し, 記録していくかを検討することは意義がある。個人の活動は単発であるかも知れないが, それらを

統合し, 継続的なものとして捉えることで, それらの意義はより一層深まるため, 教育・研究・調整機能を兼ね備えた拠点が必要である。

現在, 山口大学吉田キャンパスには学部を越えて学生が集うオープンな空間がない。学生が集まる理由はボランティア活動に限定されないが, ボランティア活動がきっかけになることもある。第2章の問題点と課題で指摘したように, そういう空間の創出が必要である。それをボランティアルームと仮に名付けて機能と役割について考えてみたい。

学生が自発的に活動できる環境を作るためには, 大学は支援という裏方にまわり, ボランティアルームの運営を学生主体とすることが一つの方法として考えられる。つまり, ボランティア団体からの依頼によるボランティア活動だけでなく, ボランティアルームの運営自体もひとつの学生ボランティア活動として位置付けるのである。本稿では, 仮称を付けたが名称についても学生達の意見を取り込むことが望ましい。

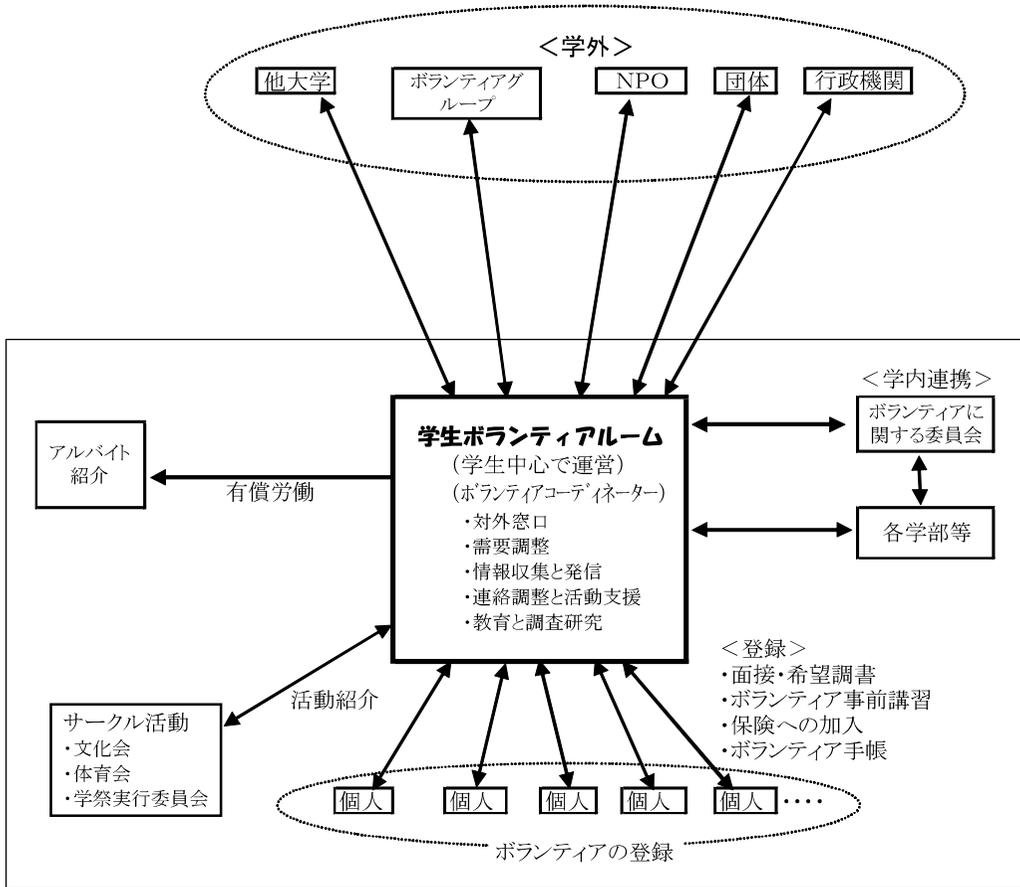


図1 学生ボランティアルーム（仮称）の機能と役割

ボランティアルームの考えられる機能と役割は以下のとおりである（図1）。

- 1) ボランティアを行いたい学生の情報交換の場（登録制）。情報が集まる空間を創出し、オープンな空間での情報公開と相談を行い、あと一歩踏み出せない学生の後押しをする。
- 2) ボランティアに対する理解不足やボランティアにおいてどう行動すべきかわからない学生に対して、ガイドブック配布や講習会・講義の開講等を通して、指導や教育を行う。
- 3) 需要と供給の調整を行う（学生の負担を考慮）
- 4) 個別に実施しているボランティア活動を

統括し、より効率的に行えるよう支援する（情報の集約と効率化，継続性の実現）

- 5) 外部のボランティアを必要とする団体や個人に対する対外的窓口（外部との交渉・安全体制の整備，依頼側との交渉）
- 6) 人的ネットワークや活動例等をシステムとして残す（データベースの構築）

以上のことを円滑に進める得策としては、ボランティアルームにボランティアコーディネータを常駐させることである。コーディネーターの役割は以下の内容が考えられるが、選考にあたっては、コーディネーターにはどのような人物が適任なのかを協議する必要がある。

- ① ボランティアの良さを発信・普及

- ② 学生ボランティアに関する相談, 助言
- ③ 学生ボランティアの指導者
- ④ 仲介者としての役割(対外窓口)
- ⑤ 弁護士としての役割

また, ボランティアルームでの支援方法としては例えば以下のようなプロセスが考えられる。

登録にあたっては, 団体登録と個人登録を行う。個人登録を行う学生は, 希望調書に必要事項を記入し, 事前講習会を受ける。事前講習会をよく理解し, 保険に加入した段階で, ボランティア手帳を受け取る。希望のボランティア活動の情報がボランティアルームに届いたら連絡が入る場合もあるし, ボランティアルームの情報を見ながら, 希望のボランティア活動があれば参加することになる。

3-2-2. ボランティアルームの学内支援体制

以上のように, ボランティアルームは, 学生による運営を基本とするが, ボランティアコーディネータの配置, 予算の確保等, 学生生活支援部の体制を充実させ, 大学の全体的な支援体制のもとで運営するのが好ましい³⁰⁾。

さらに, 高等教育におけるボランティアは, 初等・中等教育で行ってきたボランティア活動を基盤に, 学問的な背景のもとに行うことが望ましい。教育の一環として位置づけられることも一つの方策である。

その選択肢として, 正課授業の単位として認定したり, 認定書の授与が考えられる。正課授業の単位として認めるということは, 第2章でボランティア活動に参加しない原因の一つとなっていた「時間がない」という状況をカバーしうることにもつながる。

また, 学生のボランティア活動が活発化し分野や地域が広がっていけば, ボランティア休学制度の実施(授業料不徴収, 在籍年数制限からの除外, 9月入学促進)も検討していく必要がある。

4. 今後の課題

最後に, 学生ボランティア活動に対する具体案をまとめると, ①ボランティア活動について情報や人が集まる拠点を作ること, ②活動の意義を客観的に認識するための学習の場を創出すること, ③活動を認定書や単位によって評価することである。これらの実施にあたっては委員会の設置による具体的な協議が必要となる。

山口大学においては, 当面, 学生の活動状況の把握を進めていくことが必要であろう。これまで実施されてきた活動もこれから実施される活動も, まずは状況把握のための情報集約が必要である。それらは, 将来, ボランティアルームが設置された際の基礎データとなるからである。ボランティア活動の窓口は, これまでと同様に学生支援センター(学生支援課)で行うが, 新設されたボランティアルーム(仮称)では, ボランティアコーディネーターによる支援のもとに, 学生主体の組織運営を展開し, 学生の実態及びニーズの把握に努めていくことが大切であろう。

学生 VWG が発足した当初, メンバーそれぞれのボランティアに対する認識にずれがあったり, ボランティアを漠然として捉えられていたため, ワーキングの進む方向も漠然としていた。また, ボランティアとはそもそも自発的なものなので, 大学が支援をしてしまうとボランティアの本来の意味を失ってしまうのではという意見が出たのも当然のことであった。ワーキングが進んでいくうちに, 大学による“しかけ”が必要とされるのは現代的な流れである, という共通認識をもつことができた。そして, 「では, 大学側は何ができるのか, どういう“しかけ”が山口大学の学生にとってベストなのか」ということが, ワーキングの中心課題になった。「何かしたい」と思いながら今は行動に出せない学生が潜在的に存在しているため, その“しかけ”

の意味は大きい。

ボランティア活動は、山口大学の理念である「発見し、はぐくみ、かたちにする」体験ができる一つの手段である。それらの活動を通して、学生が人間的に成長し、市民活動に対する意識を醸成させ、豊かな社会を構築するための一員となる可能性やその波及効果は計り知れない。

(エクステンションセンター 講師)

(大学教育センター 講師)

(国際センター 講師)

(学生支援センター 講師)

<付記>

本稿は、2004年度の「大学教育機構・学生ボランティア活動支援検討ワーキング・グループ」(座長 辰己佳寿子)の報告書に加筆修正を加えたものである。ワーキングのメンバーは、執筆者4名と、寺本和仁(学務部学生支援課長)、田中久義(元学務部学務課長・現岐阜大学学務課長)、林章司(学務部学務課専門員)、石黒智幸(学務部学生支援課専門職員)であった。2005年度は「学生ボランティア等の支援・推進に関する施策策定ワーキング・グループ」(座長 植村高久学生支援センター長)として展開している。本稿執筆においては、ワーキングメンバー及び学生諸君の多大なる協力を得た。ここに深謝の意を表します。

<参考文献>

「ボランティア白書2005」編集委員会、2005、
『ボランティア白書2005』日本青年奉仕協会。
中央教育審議会、2002『青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について(答申)』。
兵庫教育大学、2004、『平成15年度第7回学生生活実態調査報告書』。

北見工業大学、2004、『平成15年度第9回学生生活実態調査報告書』。

内外学生センター、2001『学生のボランティア活動推進に関する調査研究報告書』。

日本学生支援機構編、2004『大学と学生(特集:学生ボランティア)』第478号、第一法規。

佐々木正道編、2003『大学生とボランティアに関する実証的研究』ミネルヴァ書房。

高橋勇悦・高萩盾男編、1996、『高齢化とボランティア社会』弘文堂。

田中ひろし、2002、『学生のためのボランティアガイド』同友館。

柳父立一、2002『生涯学習成果をボランティア活動に生かすための方策に関する研究』平成12・13年度科学研究費補助金研究成果報告書。

山口大学学務部、2001『第14回学生生活実態調査報告書』。

- (1) 山口大学では、複数の学生により構成される団体が自主的に特定のテーマを企画・実施する「おもしろプロジェクト」を支援している。その目的は、学生の自主性、豊かな創造性の高揚に資するとともに、広く学生の相互理解と親善を図るため、学生に経費の支給又は物品の貸与等を行い、その活動を支援することである。平成17年度「特色ある大学教育支援プログラム」に選定されている。
- (2) 対象者は、共通教育講義の「社会と組織」という主題別講義を受講した学生で、ボランティア活動を含めた社会活動全般について関心が強いと判断した。
- (3) 山口大学は、人文学部、教育学部、経済学部、理学部、医学部、工学部、農学部という7つの学部がある。その他に学内には3つの機構があり、その1つである大学教育機構は以下の6つのセンターによって2001年に組織された。教育・評価システムに関する大学教育センター(外国語センター)、入試システムに関するアドミッションセンター、学生支援システムに関する学生支援センター、国際企画、国際交流及び留学生支援システムに関する国際センター、保健管理システムに関する保健管理センター、教育における社会連携に関するエクステンションセンターで構成されている。